

本書執筆の動機や目的は序章に記した通りであるが、直接のきっかけとなったのは日本社会党の消滅という事実以上に、理論的関心であった。私は、権力資源動員論を用いて日本の福祉国家研究を進め、その一応の成果を『日本型福祉の政治経済学』（三二書房、一九九三）として公にした（本書は、二〇〇五年ミネルヴァ書房より刊行された『日本型福祉レジームの発展と変容』の第一篇として再録）。しかしその時には既に権力資源動員論への批判が相当目に付くようになっていた。本書第一章で取り上げている資本の権力論や階級交叉連合論、さらには歴史的制度論が、権力資源動員論への主たる挑戦である。権力資源動員論に対しては、スウェーデンにおける社会民主主義を過度に普遍化するものである、あるいは偏重するものであるという外在的批判がしばしばなされるが、これらの理論的挑戦は、その種の議論とは異なりスウェーデン社会民主主義の研究に内在し、再解釈によって権力資源動員論を乗り越えようとしている点で魅力的であり、建設的な開かれた論争を実現していた。

しかしながら、それらの理論が権力資源動員論に取って代わるものかといえば、私にはそのようには思われなかった。資本の権力や階級交叉連合論は、権力資源動員論を用いた実証研究の批判としては説得力を持つにしろ、その主張は権力資源動員論の理論的射程内のものであるし、歴史的制度論は権力資源動員の環境や文脈の問題である。つまりそれは権力資源動員の制約条件を明らかにするものであり、決して権力資源動員論とは矛盾するものでも、相反するものでもないように思われたのである。そこで、これらの理論動向を統合した視点から実証研究を行おう

と考えるに到った。

このような理論関心を背景に、日本社会党―総評ブロックが研究対象として選択された。それは私が日本政治研究を主たるフィールドとしていたという偶然性によるものであるが北欧スウェーデンの「強い」社会民主主義の研究から生まれてきた理論に啓発され、極東日本の「弱い」社会民主主義を料理してみようという野心がなかったわけではない。私の試みがどこまで成功しているかは、読者の判断に委ねるしかないが、主観的には、階級交叉連合の凍結としての五五年体制というアイデアによって、そして公共部門の一般的性格と特殊日本的制度的条件を明らかにすることによって、そしてそのような制約下での合理的選択としての護憲平和主義戦略という道筋を辿ることによって、私なりに戦後日本の左翼の存在意義と限界を明らかにすることができたように思う。

本書テーマに関わる重要な研究が、その後続々と生まれている。たとえば原彬久「戦後史のなかの日本社会党」(中央公論新社、二〇〇〇)、森裕城「日本社会党の研究」(木鐸社、二〇〇一)、中北浩爾「一九五五年体制の成立」(東京大学出版会、二〇〇二)、山口二郎・石川真澄編「日本社会党」(日本経済評論社、二〇〇三)、水野秋「太田薫とその時代 上下」(同盟出版サービス、二〇〇二)、久米郁男「労働政治」(中央公論新社、二〇〇五)、五十嵐仁編「戦後革新勢力」の源流」(大月書店、二〇〇七)などがある。また当事者サイドからのメモワールとして、五十嵐広三「官邸の螺旋階段」(ぎょうせい、一九九七)、久保巨「連立政権の真実」(読売新聞社、一九九八)は執筆時には刊行されていたにもかかわらず参照できておらず、石橋政嗣「五五年体制」内側からの証言」(田畑書店、一九九九)、伊藤茂「動乱連立」(中央公論新社、二〇〇二)、船橋成幸「証言」戦後半世紀の政治過程」(明石書店、二〇〇二)などはその後出版されている。ただ五十嵐、久保、伊藤各氏からは幸いにも直接お話を伺う機会があり、また日本経済新聞に連載された石橋氏の「私の履歴書」を読むことができたので、必要な情報については執筆時にほぼ収集できていた。

国労関係では、民営化を推進した中心人物たちによる手記、葛西敬之『未完の「国鉄改革」』（東洋経済新報社、二〇〇二）、同『国鉄改革の真実』（中央公論新社、二〇〇七）、松田昌士『なせばなる民営化J R東日本』（生産性出版、二〇〇二）などがある。

このような研究成果や新たな証言を、本書では取り入れていない。それらを下敷きに資料的な補強をすることは可能であるが、そもそも本書は資料的価値を目指した研究ではないし、本書での基本主張はなお妥当なものであると判断したため、いたずらに分厚い記述は論旨の明快さを損なうだけであると考えたためである。本書は、あくまで比較政治経済学の研究蓄積を踏まえ、明確な分析用具と視座によって日本社会党―総評ブロックの興亡を概念的体系的に理解しようとする試みである点を、改めて記しておきたい。

改訂増補版出版に際し、お世話になったのは、初版同様小西英央氏である。一〇年近い歳月は、氏を若手から中堅の敏腕編集者へと変えたが、わが身を振り返れば、馬齢を重ねてしまったと内心忸怩たる思いがある。研究者として、これからの一〇年が肝心と気を引き締めている。このように小西氏は、自らを振り返るきつかけまで与えてくださった。深謝したい。

最後に、改訂にあたって校正を助けてくれた京都大学大学院学生、近藤正基、荒木隆人、河村有介各氏に記して謝意を表す。

著者